

ゆっくり顔を押し上げたところでやっと、今まで自分は眠っていたのだと分かった。

何度か瞬きを繰り返すうちに意識がしつかりと現実に戻ってくる。小さく身じろぎをするとベッドが軋んだ。頭だけを横に向けて見えた、窓の外に広がる空は、暗い青のグラデーションに染まっている。どうやら今はまだ早朝らしい。両腕に力を入れて一気に体を起こせば、頭が重くて視界が揺れた。

この部屋はひどく静かだ。この静けさが、覚醒前の世界との境界を曖昧にする。

枕を挟んだ壁に背を預け、しばしばんやりと外の青を眺めていた。

しかしその時間はあまり長くは続かない。部屋の外から控えめな足音が聞こえてきて、僕の神経が全てドアのほうに集中した。少し緊張しながら注視していると、やがて引き戸がゆっくりと開けられた。この部屋の外もまだ暗いよ

うで、そこに立っている人物の顔までは見えない。

だが今のドアの開け方からして、きっとこの人は僕がまだ寝ているはずだと気を遣ってくれたのだろう。そう思うと、人影程度にしか認識はできないが、騒ぎ立てる気などは起こらなかった。

「おはよう、ございます」

とりあえず何か声をかけようと試みたが、自分の口からは掠れた声しか出なかった。

それでも相手にはきちんと届いていたようで、体がぴくりと跳ねたのが見て取れた。しかし、その後はまた動きが止まって。

これはどうしたものかと計りかねているうちに、相手の方がこちらに近づいてきた。ドアの近くにあった丸椅子を抱えている。僕のベッドの傍らにそれを置いて、どかりと腰掛ける。

そして。

「おはよう、あき暁」

低く穏やかな声で呼ばれたのは、僕の名前。

微笑するその顔を近くで見ると、僕はやっと彼が誰であつ

たのかを知った。

「……黎^{れい}」

慣れた呼び名が勝手に口からこぼれ落ちる。

「そうだよ。……なんて顔してるの」

くすくすと、小さいながらも珍しく声を出して笑う、親友のその姿を見て。

僕には今のこの状況が、全て理解できた気がした。

* * *

まるでフィクションの世界の住人だ。

中学一年当時の僕の、壬生黎士^{みぶれいじ}への第一印象はそんなものだった。

地元の名家の一人息子、文武両道で成績優秀、加えて美形とくれば、本当に自分と同じ人間なのか疑ってしまうのも仕方ないことだろう。

いたって平凡な家庭の僕とは、文字通り生きる世界が違いそうなる。そんな人物が普通の公立中学で、しかも僕と一緒にのクラスで生活しているのだ。入学当初はそれが不思議

議に思えてならなかった。もともと、彼は冷たそうにも見えるその容姿に反して社交的で、二か月も経つころには常に人に囲まれていたのだけれど。

ただ、それでも彼はやはり異質な存在だった。

クラスの中で皆に紛れて微笑しながら、時折……全てを諦めたようなからっぽの表情で、どこか遠くを見る。

なんと表現すべきか分からないが、そう、雰囲気とでもいうのか。そのときの彼が纏う空気は、明らかに人とは違っていた。

人と関わるのがあまり得意でなかった僕は、窓際の席で本を読みながら、ただその姿を視界の端に映していた。それだけのこと。僕と彼とは親しくもなんともない、ただのクラスメイトで終わるはずだったのだ。

偶然、彼と二人で話すまでは。

「まだ帰らないんだね」

文化祭の片付けも終わり、すっかりいつも通りに戻った教室で一人、ぼうつと窓の外を見ていたときだった。廊下から音もなく入ってきていたらしい彼に、背後からいきな

り声をかけられた。

「っ!? ……壬生、くん？」

誰も来ないだろうと思っただけに、本当に心臓が飛び出るかと思つた。声にならない声を上げる僕に、彼が小さく吹き出す。

「なんて顔してるの」

「いや、そりゃ、いきなり背後から話しかけられたらこうなりますよ」

「ふーん。そうかな」

「そうです」

おかげで寿命が縮みました、と小さく抗議してみたら、彼はまた笑つた。

「悪かつたよ。でも、こんなところで残って何してたの」

「何って……別に、何もしてなかつたですけど」

「え、じゃあやつぱりずっと空見てただけなんだ？」

「……君は一体いつから見えてたんですか」

どうやら彼は無言で僕を観察していたらしい。そんなことならもつと早く声をかけてほしかった。誰もいない教室で空を眺めているなんて、見ようによつてはただの奇行だ。

恥ずかしいことこの上ない。

「いや、そんなに観察してたわけじゃないよ？ せいぜい

五分くらいだと思うけど」

「充分長いでしょうが！」

「だつてお前が気付かないから」

さらりとそう言つてのけた彼は、当然のように僕の隣に立つた。窓枠に右手を置いて、さっきまでの僕と同じ方向を見上げる。その緩慢な動作を見ると、一人であたふたしている自分が馬鹿馬鹿しく思えた。

「教室に一人なんて状況はあまりないでしょう？ だからなんとなく、いつもと景色の見え方が違うような気がして」

それでこうしていただけですよ。

彼とはほとんど話したことなどなかつたのに、肩の力が抜けてしまえば、不思議と普通に言葉が出てきた。

「へえ、なかなか詩的だね」

「普通は引くところじゃないですか？」

「引かないよ。さすが文芸部員つてところかな」

馬鹿にしたり笑つたりもせず、いたつて自然な口調でそう言われて少し驚いた。

「僕の部活、知ってたんですか？」

「まあね。お前の書いた話好きだし」

返ってきた予想外の答えに、「はあ？」と何とも間抜けな声を出してしまった。

「どういうことです」

「どういうことも何も、そのままの意味でしょ。まあ、今日配ってた冊子読んだだけけど」

「あれを読んだんですか……」

確かに部で冊子は配っていた。ついでに言えば僕の作品も載せた。けれど、あんなものは卒業生か父兄しか持っていかないと先輩から聞いていたはずで。

「だってペンネームも使わないで、思いつきり実名で載せてたし」

「……まさか同級生が見るなんて思わなかったんですよ」

「うん、正直俺もそんなに興味なかったんだけどね」

じゃあどうして。

聞いかける前に、彼の方が先に口を開いた。

「名前が似てたから、何となく気になったんだ」

「名前？」

「そう。……俺が黎士で、お前は暁。黎明と暁あかつき、どっちも夜明けのことでしょ」

言われてやっと意味が理解できた。音ではなく漢字を見れば、確かに近いかもしれない。

「そんな風に見たことはなかったですね」

「そう？」

「面白い見方だと思いますよ」

「いや、お前の小説のほうが面白いよ」

「もういいでしょう、それは」

このまま流してくれたらよかったのに。彼はどうあってもその話に戻したいらなかった。

「本当によかったんだってば。……無駄にごちゃごちゃしてなくて、ストーリーが簡潔で。あと何より、言葉の選び方が好きだな」

真顔のまま淡々と褒められると、お世辞ではないように聞こえてしまう。正直、批評されるより恥ずかしい。

けれど、それ以上にただ嬉しかった。

「ありがとう、ございます」

「……どういたしまして？」

なぜか眉間に皺を寄せ、疑問符付きでそう答える彼に、
今度は僕の方が笑ってしまった。

「意外です。そんな顔もするんですね」

「……俺もお前のイメージが色々変わった」

「何がどう変わったんです？」

それ以前に、彼は僕の存在を認識していたのだろうか。

わりと本気で疑問に思ったのだが、彼は「さあね」とだけ言っただけでぐらかした。

「ただ、さっきまでは、結構変わったことする奴なんだな

あと思ってたかな」

「空を見てたことが？」

「うん。でも、今はちよつと分かる」

そして彼は再び僕の方を向き、その目を細めて言う。

「こうやってただ雲が流れてくだけでも、綺麗だ」

それから彼と僕とはよく言葉を交わすようになった。

初めはあいさつ程度から。学年が変わってまた同じクラスになるころには、いつも近くにいた気がする。

毎日毎日飽きもせず、たくさん話をした。

好きなもの、嫌いなもの。お気に入りの作家、おすすめの本。僕の書いた小説への感想と批評。家の話に、兄弟の話。そしてそれらの倍以上の、くだらない話。

「晩もどこの御曹司なんだと思ってた」

いきなりそう言われたときは、飲んでいたコーヒー牛乳が気管に入って盛大にむせた。(彼曰く、一人称が「僕」なのは大抵そういう育ちの人間だったそう。だから家では俺もそう言ってるよ、とよく分からない告白もされた)

そんなこんなで彼と一緒にいて、気づいたことが二つ。

一つ目は、完璧に見えた彼は意外にも抜けているというか、ときどきまるで小さな子供のようにということ。

変なところでぶっ飛んだ言動をかます彼は、そのくせ有言実行主義なものだから、幾度となく無茶苦茶なことをやってのけては僕の常識をぶち壊してくれた。

ちなみに一番衝撃的だったのは、『流し素麺？ 何それ知らない』『え、見たことないんですか？ 竹に素麺を流して

食べるんですよ』『……へえ。面白そうだねそれ。明日やろうか』という会話の翌日、彼が竹を脇に抱え、タッパーに素麺を詰めて登校してきたことだった。

そして二つ目が、あの切れ長の黒い瞳は、色々なものを捉えるのがとても上手いということ。

『あ、今の消えかけのやつ綺麗だ』

『でも割れる瞬間が一番芸術的だったんじゃない？』

『一方向に揺れると色が変わって面白いね』

『炎が燃え上がったとき、まるで生きてるみたいだった』

近所の河川敷での花火大会のときに、高価なガラスの花瓶が割れたときに、空き地の一面に咲く黄色の花を見つけたときに、文化祭のキャンプファイヤーを囲んだときに、

普通なら見逃してしまうであろう、実際僕には気づけない“一瞬”を、当たり前のように捉えて彼は言った。

個人的な考えなのだが、プロの作家に限らず、物を書く人間に一番必要なのは目だと僕はずっと思っていた。だってどんなに何かを想像してみても、結局は自分の目で見なくては、本当の意味で言葉として書くことなどできないのだ。

だから彼のあの目がうらやましかった。いつも隣で同じものを見ていたから、なおさら。

彼の目に映るものと僕の目に映るものは、もしかしたら

赤と青くらいに違っているのかもしれない。冗談抜きにそう思ったことが何度もあった。

三年生に進級してからは、お前も来るだろ？ と当然のように彼と同じ進学校を目指すことになっていた。いや、それは全く構わないのだけれど、まさか本当に合格するとは思わなかった。他ならない彼自身が家庭教師を務めた賜物とでもいべきか。

おかげで高校三年間は中学のそれとほとんど変わらなかつたように思う。強いて言うなら、高校のほうが時間の経過が早かつたように感じた、というくらいだ。行事もたくさんあつたはずなのだが、正直あまり記憶に残っていない。ただ、特別でも何でもない日の彼との会話は、未だに鮮明に覚えている。

ある昼休み、唐突に彼は言った。

「お前は俺に何も求めないんだね」

それはあまりに脈絡のない台詞で、意味も真意も全く分からなかつた。

「求めるって、何を？」

「そうだな……見返り、とか？」

俺というヒトは、大体はそういうのを期待するみたいな
んだけど。

こともなげにそう言われて、少しだけむっとした。

「君に施しを受けなきゃ生きていけないほど、困窮した生
活は送ってませんよ」

そんなことのために三年以上も傍にいたのだと思われて
いたなら心外だ。不機嫌を隠そうともせず即答してやれば、
彼は苦笑した。

「ごめん。分かってるよ。暁がそういうのじゃないって
うのはちゃんと知ってるんだ」

けど。

「お前から物欲みたいなものって感じたことないなあと思
っただけ」

物欲。普段は意識したこともないような言葉だった。

しかし考えてみれば、物欲の類が自分の中に見えた経験
はあまりない気がした。大抵欲しいものというのは容易く
は手に入らないものであるし、そこまで労力を割くくらい
なら欲しいと思うことをやめたほうが合理的だろう、とい

う考えが根底にあるせいかもしれない。

「生活に必要不可欠なものは別ですけど……そうですね、
確かにそうかもしれません」

「ふーん。でも、何かないの？ 欲しいもの」

「……君に言ったら明日には実現しそうで怖いですね」

「それは分からないよ？ 例えば、ゾウが飼いたいか言
われたら俺でもさすがにちよつと困るかな」

「何ですかその個人的な例え。いりませんよゾウなんて」

むしろ、それでも「ちよつと困る」程度なら結局は叶え
てしまえそう。誕生日に「はい、あげるよ」なんて言っ
てほんとゾウを渡してくる彼を想像したら、思いのほかリ
アルでやっぱり怖くなった。

「じゃあ何が欲しいの」

「いきなり聞かれても困るんですけど」

「考える時間はたくさんあるよ」

「ああ、何が何でも言わせる気なんですな」

こうなると彼はなかなかしつこい。話をそらそうとし
ても、絶対にそれを許してはくれないのだ。もう諦めて何か
答えるしかない。

欲しいもの、か。急に問われても案外出てこないものだ。視線を泳がせてみても、ちっとも思いつかない。文具、時計、服、本……どれも違う気がした。

助けを求めるように再び彼の顔を見れば、どうやら悩む僕をじっと見ていたようで、視線がぶつかった。

「あ」
そうだ。

あつた、欲しいもの。

「何か思いついた？」

「はい。もし何でもいいなら、」

そこから先は、何も考えずに、本当に無意識に口にしていた。

「僕は、君のその目が欲しいです」

その、一瞬一瞬を見つつけられる目が欲しい。

視線を繋げたままでそう言って、数秒。時間が止まったような気がした。再び時間が動き出したのは、僕の言葉を理解したらしい彼の目が、丸く見開かれたときだった。

「……って、いうのは、もちろん冗談ですから……忘れてください」

なんてことを言ってしまったんだろう。いくらなんでもこれはない。さすがに引く。激しい自己嫌悪に陥りながらも、何とかこの空気を変えようと必死に弁解した。

しかし。
「いいよ」

焦って言葉を並べ立てる僕を制するように、いつもより強い口調で、彼がそう言った。

「いいよ。こんなものでいいなら、あげる」

顔を寄せて、僕の目を覗き込んで。

細められた彼の黒い瞳に、僕が映っていた。

「……簡単にそんなこと言わないでくださいよ」

「でも本気だ」

「なおさら悪いです」

本当に目を寄こされたりしたら困る。彼ならばやりかねないと、わりと真剣に心配した。

そんな僕を知ってか知らずか、彼が言葉を重ねた。

「うん、さすがに今すぐに渡したりできないけどね」

「当たり前ですよ」

「だからまあ、いつか気が向いたら。ね」

さらりと不安を煽る一言を添えるあたりが、何とも彼らしいと思った。

特に何事もなく迎えた高三の春。もしかしたらまた大学も彼と同じところに行くことになるのかな、なんて漠然と考えていた。

けれど、そうはならなかった。

文芸を学問として勉強したい、そのために県外の大学に行こうと思う。そんな内容をぼつりぼつりと話すと、彼は

「そう」とだけ平坦な声で言った。

「……止められるかと思ってました」

根拠もなくそう思っていたことを告げると、彼はふっと笑んだ。

「お前の人生まで曲げるつもりはないよ。それに、今よりもっといい文章書いて、俺に読ませてくれるんでしょ？」

「そうですね……保証はできませんけど」

「いいよ。勝手に楽しみにしておくから」

慣れ親しんだ場所を離れる不安は、もちろん感じないわけじゃない。けれどだからこそ、有無を言わせない彼の言

葉が何となく心強く思えた。

「黎は、ここで医者になるんですか」

「うん。ここの土地好きだし。家も継ぎたいからね」

きつぱりと断言されて、内心驚いた。

昔から、自分の家はあまり好きじゃないと言っていたのに。

「……よくフィクションで、こんな家継ぎたくない！とか抵抗する奴いるけどさ、俺はあんな馬鹿なことしない」

それは、僕が口に出さなかった言葉に答えるように。

「本当に嫌なら大人しく継いで、後から自分の手で好きなように変えてしまえばいいんだ」

「……君なら本当にできそうですね」

「できそうじゃなくてそうするんだよ。だからまあ、来年から四年間は別々の道、だね」

「それ、四年後には帰ってこいつて言ってます？」

「当たり前。どうせなら地元から有名作家になってよ」

彼に決定事項にされてしまったのは、もう僕に拒否権なんてありはしない。しかも、どうせ僕の夢は初めからそれなのだから。

「善処します」

苦笑してそう返せば、彼は満足げに頷いた。

卒業してからは、一度も直接会うことはなかった。

ときどきお互いに、メールで近況報告をするくらい。ただ、僕が作品を載せた冊子を送れば、数日後には必ず電話で感想をくれた。決まって夜にかかってくる着信から、忙しい合間を縫って時間を作ってくれているのが窺えた。

彼の声を聞きたびに、自分も頑張ろうと思えた。それまで以上に、言葉に誠実でありたいと思った。誰かに、彼に、届く文章が書きたいと。

ただ、そう思っていた。

* * *

彼がベッドライトを点けると、いくらかお互いの姿が見えやすくなった。

三年前、最後に見たときよりもずっと大人びた顔。笑ってはいいても、そこかしこに疲れと安堵の色が見える。左目

の下の隈は痛々しいくらいだ。

彼は僕から視線を外そうとはしない。それは僕もまた同じだった。

何か言わなくては。

そう思うのに、何も言葉が出てこない。

しかし、そんなことは分かっているという様子で、彼はゆっくりと話し始める。

「起きるのが早いんだか遅いんだか、よく分からないね」

今はまだ四時半だけど、それにしても寝過ぎだ。

小さく溜息を吐きながら、そんなことを言う。呆れているような口ぶりなのに、今まで聞いたことのないほど穏やかな声だった。

それが耳に心地よくて、気持ちが少し落ち着いてくる。

同時にぼんやりと、やっぱり今はまだ夢の中なんじゃないかと思ってしまう。

そうではないと、痛いほどに分かっているのに。

「……夢を見ていたんです」

やっと口にできたのは、たったそれだけだった。

意味も繋がらない言葉。それでも、彼は取りこぼさずに

それを拾う。

「へえ。どんな夢？」

膝の上で両手を組んで、軽く身を乗り出すような体勢に変わった。それに促されるように、僕も言葉を継ぐ。

「昔、君の目が欲しいと言ったのを覚えていますか」

「……ああ、もちろん」

ほんの少しの間の後に返ってきた小さな肯定。彼もあの何の変哲もない日を覚えていたのか。僕と同じように。

もし、そうだとしたら？

自分自身に問おうとして、やめた。その先を考えてしまえば、きっと僕はまた何一つ口にできなくなってしまう。

それに、答えはもうとっくに見えているのだ。

だからこそ今、僕は彼と話をしなくてはならない。

覚悟を決めて、深い呼吸を一つ。そして僕は眠っている間に見た情景を思い出しながら、彼に夢の話をする。

「夢の中で、僕は君と片目を交換していました」

誰に告げられたわけでもなかった。

それでも、夢の中の僕は分かっていたのだ。自分の瞳の

半分が彼のものであることを、そして彼が僕の片目を持っていることを。

それをただ、事実として知っていた。

「多分、寒い冬の日の早朝でした。僕は君と一緒に、高校の近くの河川敷に行くんです」

自分も彼も学生服姿だった。すごく寒かったのに、防寒具はマフラーだけ。耳を真っ赤にして、白い息を吐いて。

「しばらくはずっと土手の道を歩いていました。でも、あの小さい神社の鳥居が見えてくるあたりで、僕たちは一気に坂を下りました。……そうしたらね、その芝生一面、霜が降りて白くなっているんですよ」

それを見た瞬間、思わず息をのんだ。

彼と二人、何も言えずにその場に立ち尽くした。

だって、それはもう、

「朝日に照らされて、きらきら光っていて、すごく」
今まで自分の目では見たこともないくらい。

「すごく綺麗で、涙が出ました」

部屋に再び沈黙が落ちた。

互いに一切の動きがなくなつて、いつかのようにまた、時の流れが止まった錯覚に陥りそうになる。

やつとのもので視線を少し落とすと、彼の口元が視界の端に映つた。しばらくすると、らしくもなく荒れてがさがさになった唇が動く。

「だったら、笑つてよ」

その小さな声に、顔を上げた。

それは、綺麗なものを見たときに？

呟くように問えば、彼は「違う」と言う。

「だつてお前、今も泣いてるじゃない」

「え、」

何を言っているんですか。

そう続ける前に、右手の甲にぱたりと雫が落ちた。

……ああ、今、僕は泣いているのか。

そう自覚した途端、頬をいくつもの涙が伝うのを感じた。ばたばたと、勝手に溢れてきて止まらない。

それと比例するように、胸の奥からも何かがかみ上げてくる。それはぐちゃぐちゃで、自分でもよく分からない感情。収めきれなくなつたそれらは言葉になつて、口から吐

き出される。

「黎、君は」

その先を言うのが怖かった。頭ではもう分かっているのに、口に出してこの現実を現実と認めてしまうのが、やはりどうしても怖い。

そう、思うのに。

涙を流す涙腺も、声を発する口も、体の何もかもが意識とは関係なく働き続けていた。

「君は、本当に、」

小さく震える左手を、彼の方に伸ばす。

手よりも温かい頬をなぞつて、ゆっくりと上へ。

そして、指先はついに。

彼の右目の白い眼帯に、触れた。

「僕に、この目をくれたんですね」

僕の言葉を聞いて、彼は見えている左目だけを柔らかに細めた。眼帯から一ミリも動かさずにいた手に、彼が自分の手をそつと重ねる。

「よかった。ちゃんと見えてるんだね」

愛おしいと、大切だと言うように。彼は怖いくらいに優

しく囁いた。

そう、見えているのだ。目を覚ましたときから全部。

僕の目はもう、こうして何かを映すことなどできなかつたはずなのに。

「さすが、暁は状況理解が早い。……そうだ、お前の思っている通りだよ。俺の右目をお前にやったんだ」

「なんで……どうして、こんなことを……っ！」

「それは俺のセリフだ」

ぐっと、手を掴んで引き寄せられた。力を入れていなかった体は容易く彼の方へ傾く。

笑ってなんかいない、真剣な顔がすぐ近くにあった。

「自殺なんかされちゃたまらないよ、暁」

そんな、微かに震える彼の声は初めて聞いた。

* * *

近い将来失明すると言われたのは、二年前、大学二年になる直前のことだった。

ときどき視界がぼやけるような感覚があるのには、その

少し前から気づいていた。でもそれは、元々視力が悪いせいでとずっと思っていた。

ある朝起きたら、視界の中心がひどく霞んでいた。そしてそこでやっと眼科へ行った途端に、失明の宣告。

とても信じられなかった。だってまさか、自分にそんなことが起こるなんて思わない。

しかし月日が過ぎていくごとに、その未来は確かな現実になっていった。

ある日突然、僕の世界にかかった白い霧。それは次第に濃さを増していく。当たり前のように見ていたものが、文字通り目の前で消えていった。

かかりつけの医師は、進行を遅らせる最大限の努力をしてくれたと思う。しかし、それはほとんど意味を成さなかった。気づくのがあまりにも遅すぎたのだ。

角膜ならまだしも、網膜となればもう手の打ちようはないも同然だった。近年、ずっと不可能だと言われていた眼球の移植が成功したらしいが、移植に使える目など少ないのが現状で、まず期待はできないと説明されていた。

目のことを告げた後、すぐにやって来てくれた母はずっ

と泣いていた。それはまるで、何故か涙の出ない僕の代わりに泣いているようだった。何も悪くないのに、何度も何度も謝られた。その姿を見ているのが辛くて、僕はただひたすら普段通りに振る舞って過ごしていた気がする。きつと、あのととき無理に笑った顔は見れたものではなかったのだろうけれど。

本当は不安で仕方なかった。

これから自分はどうすればいいのだろうか？ 大学は？ 生活はやっていける？ 社会に出ていくことは可能か？ 考えても考えても、先の見えない暗い未来の想像が広がるばかり。

しかし何より僕が恐れたのは、小説が書けなくなることだった。

ペンを取って文字を書いたり、パソコンを使って文字を打ったりできるのかはもちろん怪しい。

だがそれ以前に、もう小説の中に何も描くことができなくなるだろうと思った。

だって、僕はずっとそれを一番大切なものだと信じていたのだ。まず見ることをしなくては、何も自分の言葉で語

れなどしないと。そう思っていたのに。

これからはずっと、たった二十年ほどしか見ていない、しかも時と共に薄れていく記憶の中の世界を思い出すだけになる。

そうなったら、目が見えなくなったら、もう終わりだ。

そんなことを考えていたとき。

『今回の話もよかった。特に雪の描写が好きだな。こっちはあまりないけど、お前のいる場所ではそんな風に雪が降り積もるんだね』

最後の電話で彼が言った、小説への感想を思い出してしまった。

……もし、僕はもうそんな小説は書けないと言ったら、彼はどんな反応をするだろう？

ふと浮かんだその疑問を自分に投げかけ続けた。そうして僕自身から返ってくるのは、どれも受け入れたくないなどない答えばかりだった。

絶対に彼には言えない、と思った。

こうして未知の恐怖に震えて、何も書けなくなつて、弱り切つて、喚いて。そんな姿を彼に晒したくはない。いや、

晒したりしない。

そうだ。

いっそのこと、最悪の未来が来る前に、全て終わらせてしまえばいい。

そう決めてからの行動は早かった。

まず、小説のデータが入ったメモリーを捨てた。どうせもう書くことは叶わなくなるのだから、必要ない。

次に、真っ白な紙を用意してペンで謝罪を書いた。体裁など気にならなかった上、目に頼らずに書いたから、多分相当ひどい内容だったと思う。遺書とも呼べはしないだろう。それでも、心配してくれた両親に言葉を残さなくてはならない、という気持ちの片隅にあった。

続けて、彼にも何かを書いた気がする。謝罪だったのか、それとも別の言葉だったのかは覚えていない。ただ、結局書きあがったそれをぐしやりと丸めて捨てただけは覚えていない。

最後に、自殺の準備をした。

死ぬ方法は何でもよかった。しかし時間や手間がかかるものをやる気にはなれない。結局僕が選んだのは、一番簡

単な首吊りだった。

ただ、一つ気にかかったのは、首吊り自殺の死体はひどく汚いということ。自分でも馬鹿らしいと思うが、できるだけ綺麗なまま死にたいという気持ちでどこかにあった。というより、情けなく見苦しい姿を見せないために死ぬのに、死んだ後にそうなってしまつては意味がないと思つたからかもしれない。

とにかく、できることを全てやつた。昔どこかで見た自殺の手順通りに、まずは五日間の絶食から。失禁等の防止のためというあれは、実際にやってみるとさして辛くはない。むしろ、頭の中が日に日にすっきりしていくような気がさえた。だからそこからは淡々と準備ができたと思う。電気コードで輪を作つて、床から九十センチほどの位置のドアノブに固定。余計なものが飛び出してこないように、ガーゼを口に入れてマスクを付け、目隠しをする。

事前にやつておくことは終わった。

一度だけ息を深く吸って、吐いて。ゆっくりと首に輪をかける。ドラマの中でよくある自殺と違い、こんなにも床に近い場所で死ぬ自分を想像したら、なんだか滑稽で笑え

た。でも、何故かもう迷いはなくなっていた。
全身の力を抜いて、コードに体重を預けた。

頭が熱くなる。次いで、耳鳴りが聞こえ始めた。

その直後には不思議なことに、ずっと霧がかかったようにぼんやりとしていた視界に光を感じた。

あまり苦しくはない。それどころか、意識が遠のいていく感覚が心地よかった。もちろん、そんなのはただの錯覚だったのかもしれないが。

ああ、死ぬというのはこういうことなのだ。

あつけない。普段僕たちが考えている以上に。

次か、その次の一瞬で、終わる。

……四年間だけだったはずなのに、いつまでも帰らなかつたら彼は怒るだろうか。

意識を失う直前、最後に思ったのはそんなことだった。

* * *

あのまま死ぬはずだったのに。

それなのに、あろうことか僕は白一色の病室で目を覚ま

した。しかも右の目は、意識を失う前より鮮明に世界を映しているのだ。

それは自殺が未遂に終わったこと、そして、通常ならあり得なかつたはずの治療が成されたことを意味している。

そんなときに眼帯をした彼の姿を見れば、ここまでの経緯など容易く理解できてしまった。

「……二週間近くも眠ってたんだよ」

掴んでいた僕の手を離して、彼が言う。

「もし、お前のお母さんがあと少し遅れて来てたら、お前は死んでた」

「……母から聞いたんですか」

「そう。首吊ろうとしてたことも、目のことも全部聞いた。それから、お前が俺宛に書いた遺書の成りそこないも見せてもらったしね」

遺書の成りそこないというのは、捨てたはずのあの紙のことだろうか。

何を書いたかよく覚えていないが、やはり書いたのは失敗だったらしい。きっと彼には何も告げないほうがよかったのだ。そうすれば、彼に目を差し出させることなんてな

かったかもしれない。

「寿命が縮んだよ。三年ぶりの再会が、まさかこんな形になるなんてね」

「……ずっと、ここにいてくれたんですか？」

「さっさと帰れるわけないだろ」

「……すみません」

「そんなことに謝ってほしくなんてない」

静かな声ではあるが、怒りを含んでいるのが分かった。

彼がこんな風に怒ったところはあまり見たことがなくて、正直困惑した。しかし彼は、地元から遠く離れた場所まで来させてしまったこと、引き止める形になってしまったことに怒っているわけじゃないのだ。いや、本当はそんなことは分かっている。

「……君に、何も言わずにこんなことをしてしまいました。

ごめんなさい」

「……本当にね。お前らしくもなく馬鹿げてる。俺はお前に隠し事なんてされたくないし……目が見えなくなったら、小説が書けなくなったらからって、お前との繋がりを絶つたりしない」

「分かってます。ただの、僕のエゴだったことは」

それでも僕は、君の前でだけは、どこも欠けることのない僕のままだったんです。

ついそんな本音を口にしてしまった。どうせ経緯が全てばれているなら、と思ったせいだろう。

今度は彼のほうが視線を落とす。昔より長い前髪が顔にかかって、その表情が見えづらくなる。

やがて、彼は小さく溜息を吐いた。足の間に投げ出していた手を組み直して、話し始める。

「……処置が終わって、眠り続けるお前の隣にいる間はずっと生きた心地がなかった。もう目を覚まさないんじゃないかと思つて、怖かったよ」

「……黎」

「でも、たとえ目を覚ましたとしても、お前がこの世に望みを持ってないんじゃないかって考えたら、もっと怖かった」

怖い、なんて。そんな気弱な言葉が彼の口から出てくるとは思わなくて、思わず目を丸くした。

「だから俺が勝手にやったんだ。お前の両親に、ちようど

目の提供者がいるって嘘ついて。お前の意識がない間に、お前の意志とは関係なく目の移植をさせた」

「……それは、僕がああとき、君の目を欲しいなんて言ったからですか」

「違う」

すぐさま否定されて、言葉に詰まる。それを見計らったように彼はすつと顔を上げ、僕の方を真っ直ぐに見た。

「お前が言ったのがそういう意味じゃないことなんて、ちやんと知ってるよ。本当に目をやったりしたらお前が辛く思うことも、ね」

だったらなんで。

僕がそう問う前に、答える。

「でも、さっきも言ったでしょ？ 自殺がお前のエゴだったなら、これは俺のエゴなんだよ。……ただ単に、俺がお前に目をあげたかった」

「……どうして僕なんかに、そこまでするんですか」

医者になると言った彼。その目標に対して、片目を失うことがどれだけの枷になるだろう。具体的には分からなくとも、軽いものではないのだという想像はつく。僕は結局、

自分のために彼の未来を潰してしまったのではないか。どうしたってそう思ってしまう。

しかし彼はそんな僕に、不機嫌そうな顔を見せる。

「そういう言い方やめな。俺の趣味にケチつける気？」

「いえ、そんなことは……というか、趣味って、」

「暁」

最後まで喋る前に、名を呼んで遮られた。こうやって、自分にとって都合の悪いことは何が何でも聞こうとしないところは、中学生のときからちつとも変わらない。いや、それをいつだって許してしまう僕も悪かったのだろうけれど。

僕の考えていることを察したのか、彼がふつと笑った。

「これはさ、理屈なんかで説明できるものじゃないんだよ。……こんなこと、お前は子供じみてるって笑うかもしれないけど。でも仕方ないでしょ」

嬉しそうに言って、僕の顔に手を伸ばす。まだ乾き切らない涙を拭うように、長い指が頬に触れた。

そして、ためらう様子もなく彼は言う。

「俺は、お前の言葉に惚れてるんだから」

僕の、言葉。

「どんな言葉であつてもそれは確かに心で、その心は言葉
を口にした人間自身に他ならないのだ」

そんな一文を昔、小説の中で書いたことがあつたのを、
ふと思い出した。

それから、彼がこの文を特に気に入っていて、たびたび
口にしていたということも。

……それは、つまり？

「まあ、そういうことだから。許してね？」

もうこれ以上追及はするな、と言われていている気がした。
有無を言わせない謎の迫力も、十代のときのそれとほとん
ど変わっていない。けれど、そのくせ今の彼はどこか必死
なようにも見えた。

それはまるで、幼い子供が駄々をこねているようで。

ついに僕も笑ってしまった。

「……仕方のない人ですねえ」

そっちがその気なら、僕の好きなように解釈させてもら
うことにしよう。それに、僕が彼を許さないなんてことあ
るわけがないのだ。

声を抑えながらも笑い転げる僕を見て、彼も同じように
笑みをこぼす。

もう、視界は滲んではいかなかった。

「馬鹿じゃないですか？　こんな、生きた人間から目の移
植だなんて、一体どんな手を使ったんです？」

「ん、あんまり綺麗な手口じゃないからそれは秘密」

「昔から、君は無茶苦茶なんですよ」

「そうかなあ？　そんな俺と利害関係なしで付き合うお前
の方が、よっぽど無茶苦茶だと思うけど？」

「……もう、戻せないんですよ？」

「戻す必要なんてないから大丈夫。だから、もう世界の終
わりみたいな顔するのやめなよ」

即答する彼を見たら、迷う必要などないと思った。だか
ら返すのは「はい」というたった二文字だけ。そんな僕の
返事に満足そうな表情になる彼。

しかし、すぐに何か思い出したというような顔で、

「ああ。それとさ」

と言つて、窓の方に目を向ける。

「別に夢の中じゃなくても叶うでしょ」

「はい？ 何がです？」

「だから、お前が見てたっていう夢の……泣けるほど綺麗なものを見る、っていうやつ」

おもむろに彼が立ち上がって、窓際に移動する。その姿を目で追えば、いつの間にか空の青はもう明るく、白っぽくなっていったようだった。

体で窓を隠すように、彼はそのまま僕の前に背を向けて立ち続ける。

初めはわけが分からずに黙っていたが、ずっと無言でそうされているとさすがに、一体どうしたのかと問いかけたくなる。

……が、そうするより先に彼が振り返って。

「これから色んなものを見てよ。俺と一緒に、その目で」
例えばこういうのとかね。

そう言っつて、彼がその場から横に数歩分移動した。
すると。

「！ これ、は……」

目に入ってきたのは、東から昇る暖かな橙の光。
鮮やかなその色がどんだん空を染め上げていく。地平線

から、ゆっくりと上の方へ。

そしてやがて、僕たちの目線にまで届く。

建物も雲も、何もかもを飲み込んだような眩い光景。
それは一瞬のことで、燃え尽きたような橙色はすぐに淡くなっていく。

けれど、あの生命力に溢れる色は、いつまでも目の奥の奥に残っている気がした。焼き付けるように見たせいでろ
うか、それとも。

この先一生忘れることのないであろう一瞬を思い返して
余韻に浸っていたら、彼が得意げに口を開いた。

「悪くないでしょ？ 一番最初がこの朝焼けなんてさ」

「……そうですね」

でもそれ、本当は少しだけ違います。

だって、さつき出会ったばかりの新しい世界で、一番最初にこの目を奪ったのは。

「とても綺麗だ」

何より美しい、夜明けでしたから。

※現代において、眼球の移植技術は確立しておりません。

月刊缶じうす新歓号 通巻197号
2014年 3月25日発行

編集人 芹沢一 張子 菊田泰右
印刷所 広島大学 分団BOX